今昔物語 第33話

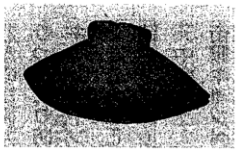
注口土器

古墳時代・鍋田川遺跡

胴部に一つの管状の突出した「つぎぐち」を付けた土器です。

器形は壺または深鉢に注口部が付いたものが多く、かなり大型のものと小さなものとがあり、前後に取っ手またはつる掛けの輪を付けたものがあります。特異なものでは、不安定な丸形に胴部の3カ所で釣り、安定が保てるようなものでもあります。

これらは土瓶形土器・急須形土器とも呼ばれていますが、昭和2（一九二七）年、中谷治宇二郎により一括して注口土器の名が与えられたものです。以後、一般に注口土器の名が用いられるようになり、いわゆる液体を注ぐ構造をもつ土器をこの注口土器と片口形土器に区分してきました。



これは縄文時代中期に現れ、後期・晩期を通じて用いられた一般的な厨房器具でした。

今昔物語 第34話

勾玉（まがたま）

身体装飾用玉類の一種です。C字にわい曲した形状をしていて、横断面はへん円形が普通です。日本独特のもので、朝鮮新羅の古墳中から発見される勾玉は、日本からの伝来品であると考えられています。勾玉の粗形は動物の歯牙によく似ています。古くは縄文時代からその形をしたと思われる硬玉製の玉が発見されています。縄文時代のものは、不整形のものが多く、形状が一定するのは弥生時代以降です。

勾玉は古墳時代に盛んに用いられ、古墳後期には群集墳中からしばしば発見される事実が示すように、広く普及しました。材料は古墳前期以前のものに硬玉が多く、古墳後期に普及した勾玉は瑪瑙（めのう）製が多いですが、ほかに碧玉（へきぎょく）・蛇紋（じもん）岩・滑石（かっせき）・ガラスなども用いられています。形状は古墳前期の丸みを帯びたC字形から、後期のコの字形に変化します。勾玉のうち頭部から孔（こう）に（貫通した穴）掛けて数条の刻線を有するものを特に丁字頭勾玉（ちょうじがしら）と呼びます。

また、大型の勾玉に数個の小形勾玉を持つものがあり、これを子持ち勾玉と言いますが、時代は古墳中期に限られ、用途も祭祀（さいし）に用いられたらしく、身体装飾用勾玉と区別することが大切です。